

はじめに

日韓歴史共同研究委員会第2分科会日本側委員会は、3名で構成され、2002年5月以来、中近世日韓関係史に関して、韓国側委員と共同研究を行ってきた。本報告書は、本分科会日本側委員会が行ってきた研究活動の成果をまとめたものである。

分科会の構成

第2分科会日本側委員会の構成は以下のようである。

研究委員

- 田代和生 (慶應義塾大学文学部教授)
- 吉田光男 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
- 六反田豊 (東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

研究協力者

- 伊藤幸司 (山口県立大学国際文化学部助教授)
- 北島万次 (共立女子大学文学部教授)
- 橋本雄 (九州国立博物館設立準備室研究員)
- 米谷均 (学習院女子大学非常勤講師)

本分科会の担当

本分科会は、中近世史を担当した。日本史で言えば鎌倉時代から江戸時代まで、韓国史で言えば高麗・朝鮮両王朝の時代にあたる。

研究の基本方針

日本側委員会は共同研究を開始するにあたって、以下の5点を基本方針として定めた。

- (1)共同研究の目的を、日韓両国の歴史研究者・歴史教育者ならびに教科書執筆者などに対して、中近世日韓関係史に関する精選された学術的情報を提供することとする。専門的研究者でなければ、研究の現状・到達点・問題点について詳細な情報を知り得ないという現状に鑑み、必要な情報の提供を優先する。
- (2)制約された時間内に最大限の成果をあげることを目標とする。このため、主題をある程度しぼりこみ、早期に研究体制に入る。
- (3)共同研究の主題は、中近世における日韓関係史上の重要問題とする。
- (4)この共同研究を契機にして、新たな研究を出発させる。
- (5)日韓両国の次世代研究者のために研究基盤を造成する。

研究主題の決定

2002年7月7日に開催された第2回第2分科会日韓合同研究会において、共同研究の主題を、現在の中近世日韓関係史研究の最重要課題とすることに合意した。選択された主題は以下の3つである。

- ①偽使
- ②文禄慶長の役(壬辰倭乱)
- ③朝鮮通信使

責任研究体制

日本側委員会は、3つの主題ごとに、責任委員を定めて担当した。すなわち、田代委員が偽使、六反田委員が文禄慶長の役、吉田委員が朝鮮通信使をそれぞれの担当とし、それぞれ研究協力者に研究依頼をした。一方で、共同研究という趣旨に鑑み、全委員がすべての主題について関与することとした。

研究の進行

共同研究は、2段階に分けて実施した。

第1段階の2002年度には、各主題ごとに研究史整理を行い、明治時代に近代歴史学研究が開始されて以来、今日に至るまでの日本で発表された著書・論文について検討を行った。この結果、研究の歴史と到達点を把握することができた。

第2段階の2003年度と2004年度には、第1段階の研究史的整理を行う過程で発見された、新たな課題のいくつかについて個別の実証研究を行った。

また、第1第2段階を通じて、研究をさらに発展させるため、日本・韓国において史料調査を行った。この結果、史料に関する新たな知見が得られ、将来の研究のための基礎を造成することができた。

本報告書の構成

本報告書は、研究計画の進行と成果に合わせて3部構成とした。

第1部は、3つの研究主題に関する学説史的整理検討を行った研究史編である。明治時代以来、2004年までの1世紀半ちかくの間に日本で発表された諸学説を網羅的に調査し、研究文献目録を作成するとともに、主要学説に即して研究史的整理を行った。韓国側の研究史的整理と対照することで、現在までの日本側研究と韓国側研究の共通点と相違点が把握される。

偽使研究は田代和生委員、文禄慶長の役研究は六反田豊委員、通信使研究は吉田光男委員がそれぞれ最終責任者となってまとめたが、全委員および研究協力者が作成に協力し、分科会全委員による検討を経て決定稿とした。したがって、各責任者と全委員ならびに研究協力者の連名とした。

調査した著書・論文は偽使研究がおおよそ100編、文禄慶長の役研究がおおよそ450編、朝鮮通信

使研究が中世・近世あわせて550編で、合計1100編余りにのぼる。文献目録には学術的価値をもつ著書・論文のみを採用した。

第2部は、学説史的検討から摘出された新たな課題を個別に研究した主題論文編である。

伊藤幸司論文「日朝関係における偽使の時代」は、14世紀末から17世紀前半までを、偽使の時代という視点から再構成し、中世日韓関係の構造的特質を摘出したものである。日韓関係における偽使とは、朝鮮王朝から正式に許可された者以外の第三者で、正規の日本使節を装って公然と通交貿易を行った者である。伊藤論文は、偽使の発生から展開・拡大・変容の全過程を追求し、その実態と規模を明らかにし、それが中世東アジア通交圏共通の存在であることを論じている。

橋本雄論文「朝鮮国王使と室町幕府」は、中世日本に来訪した朝鮮使節への接待実態を解明し、朝鮮などに対する日本の外交観を追求したものである。対馬から瀬戸内海を経て京都まで、朝鮮使節に対する海の勢力による警固と日本国王(室町殿)の応接を検討し、室町幕府が朝鮮使節を「仮想の朝貢使節」と見なしていたことを指摘している。

米谷均論文「朝鮮侵略前夜の日本情報」は、豊臣秀吉の侵略以前に各地で流されていた朝鮮の征明嚮導情報に注目し、当時の日本有事情報の伝播の様相を検討したものである。錯綜する情報が、朝鮮側を不利な状況に追い込んでいったことが描出される。

六反田豊論文「文禄・慶長の役(壬辰倭乱)開戦初期における朝鮮側の軍糧調達とその輸送」は、開戦から3ヶ月間の軍糧問題を論じたものである。本論文によって、はじめてその詳細が明らかになり、戦争遂行体制の実態を解明する手がかりが得られた。

第3部補論編は、共同研究会では直接取り扱わなかったが、本共同研究の基盤を理解するために付け加えた論文である。

吉田光男論文「日本における韓国中近世史研究教育基盤—大学・学会・研究工具—」は日本における韓国中近世史研究の位相を理解する基礎として、明治時代から現在までの中近世史を中心とした韓国史に関する研究と教育の歴史と現状を大学・学会に焦点をあてて詳細に検討し、その実態と意義を明らかにしたものである。あわせて、日本において日韓関係史・韓国史研究にアクセスするための工具類についても紹介している。

田代和生論文「朝鮮国書・書契の原本データ」は、第2部の伊藤論文の内容と対応しており、偽使の実像を探るための基礎史料である朝鮮国王・官庁が作成した外交文書に科学的検討を加えたものである。第2分科会日本側委員および研究協力者は、可能な限り全員が参加して日本全国11カ所に保管されている朝鮮王国国書25点と書契17点の調査を実施した。専門技術者の協力を得て料紙の紙質分析と蛍光X線による印鑑朱肉の成分分析を行い、真贋問題を解決するための基礎的検討を行った。その結果報告である。将来はデータを公開し、学界共有財産とするものである。